サバイバル・ゲーム

Yu-Zo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サバイバル・ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ７８０７Ａ

【作者名】
Ｙｕ－Ｚｏ－

【あらすじ】
神は確かにこの世界に存在した。なぜなら、その元凶になりうることができるものなど、神以外には考えられず、確かに、人々の意識の中にはそのときから神の意識が植え込まれていたからだ。その瞬間、ある者は歓喜し、ある者は絶望し、ある者は何もせず、ある者は面倒くさそうにため息をつき、その他ほとんどの者は正気を失った。それは、神の願望を満たすため。そして、神の希望を叶えるため。ただ、それだけのために。――そのとき世界は動き出し、そのとき世界は崩壊の一途を辿った。

プロローグ

神は確かにこの世界に存在した。なぜなら、その元凶になりうることができるものなど、神以外には考えられず、確かに、人々の意識の中にはそのときから神の意識が植え込まれていたからだ。

その瞬間、ある者は歓喜し、ある者は絶望し、ある者は何もせず、ある者は面倒くさそうにため息をつき、その他ほとんどの者は正気を失った。

それは、神の願望を満たすため。そして、神の希望を叶えるため。ただ、それだけのために。

――そのとき世界は動き出し、そのとき世界は崩壊の一途を辿った。

第1話

1

――エンゼルライン学園高等学校二棟三階一年A組の教室にて。

鳴瀬川幸也（なるせがわこうや）は、そのとき真っ先にそのクラスメイトの様子のおかしさに気づいていた。ただ、そのおかしさが異変と呼べるものであることにまで気づけなかった幸也は、机の上に上半身を突っ伏した状態のまま、再び目を閉じた。

その次の瞬間、すぐ隣で誰かが立ち上がる気配がして、その後を追うように、椅子が床に叩きつけられる鈍い音が、教室の中に反響して幸也の鼓膜を刺激した。

何事かと幸也が顔を上げたそのときには、教室の中は三十八人分のクラスメイトのざわめきに包まれていた。そして、クラスメイトの視線がすべて自分の隣の席に向けられていることに気づいて初めて、幸也は視線を右隣へ滑らせた。

幸也の視界に映ったのは、黒ぶちの眼鏡をかけた、冴えないクラスメイトだった。まったく手入れをされた形跡のない、野放しにされた天パに、いかにも度の強そうな実用性だけを追及した眼鏡、そしてブレザーの上からでもうかがい知ることのできる、貧弱なもや

し体型。その見るからに冴えず、実際クラスでは空気のように大人しい男子生徒が、なにを思ったか、六時限目の授業の真っ最中に席から立ち上がっているではないか。

幸也は無言でその冴えないクラスメイトを見守った。他のクラスメイトもざわつくことはしても「どうした」と声をかけるものはいない。ちなみに、六時限目の授業担当、現国教師の石田は、後ろの異常を無視してか、あるいは気づかずに、黙々と黒板に教科書に刻まれた漢字を書き写していた。

黒板に擦り付けられるチョークの中途半端に甲高い音は、いつまで待っても、マイペースにつまらない曲を単調に奏でていた。その間、空気のように一度も自分を表に出したことのないクラスメイトの突然の暴挙に「どうした」と声をかけてやれる強者なクラスメイトは誰一人として現れない。

つーか、そりゃあんたの仕事だろ、ヘボ教師。

幸也は、普段から無気力で、生徒に必要以下にも関わろうとしない文字通りのヘボ教師に、心の中で悪態をつく。もっとも、そのヘボ教師にこの事態をうまく収拾できるとは思えないので「どうした」なんて教師らしいことをされても困るのだが。

などと考えているうちに、三十八人分のざわめきは、不穏な空気に反応して、まるで示し合わせたかのように消えうせていた。つられて、幸也も現国教師に向けていた視線を右隣へ戻す。

「う……ううう……」

肩を強張らせて、体全体を小刻みに震わせている冴えないクラスメイトが目に映る。その口からは何を思ってか、うめき声さえ漏れ出している。

おいおい……。

これが、クラスに必ず一人はいる、目立ちたがり屋のハイテンション馬鹿な人間の仕業なら冗談で済ませられるのだろうが、あいにく、このクラスの目立ちたがり屋のハイテンション馬鹿は黙ってこの事態を傍観している。求められないときには散々目立ちたがるく

せに、必要なときには引っ込みやがって。もっとも、冗談で済ませられる雰囲気ではないので、ここでそいつに冗談を言われても困るのだが。

普段から嫌っている人間二人を心の中でけなし終えたところで、幸也はしぶしぶ、この事態を収めるために重い腰を上げた。クラスの学級委員の男女ペア二人が傍観を決め込んでいる以上、もう自分が何とかするしかないだろう。これはもう、席替えの際、くじ引きで冴えない男子生徒の左隣に席を置くことになった、自分のくじ運のなさを恨むしかない。

ガタン。ゴトン。ガタタン。ゴトン。

幸也が冴えないクラスメイトに声をかけようとしたその時、教室中に無数の鈍い音がほぼ同時に共鳴して、教室の中を乱反射した。

なんだよ、せっかく人がこの事態を収拾してやろうとしてんのによ。

不機嫌を顔に出して、その物音に対しての不満を訴えてやろうと視線を冴えないクラスメイトから逸らしたそのとき、新しい異変はすでに始まっていた。

それは、どこからどう見ても異様な光景だった。まあ、朝のホームルーム、授業、その後のホームルームを合わせると、一日のうちに計十六回は、気のない挨拶をするためにクラスメイト全員が揃って席を立つ機会はあるから、今の状況は決して珍しいというものではないのだが、まだ授業終了までには大分余裕があるこの時間に、何も示し合わせていないにもかかわらず、全員が席を立っている状況はかなり異様だった。みんながみんなわざわざ椅子を倒していることも、みんながみんな、倒れた椅子を直そうともしないことも含めて。

異様だった。

幸也はどうしていいか分からず、閉口したまま、無表情で立っているクラスメイト三十九人一人一人を確認した。そのうち、すぐに冴えないクラスメイト同様、ブルブルと体全体を震わせて、うめき

声を漏らすクラスメイトが一人、また一人と増えていく。
まさか、と幸也は思った。
さっき、三十八人分のざわめきが示し合わせたかのように、消えうせたのは――。
嫌な予感が悪寒となって、幸也の背筋を走った。
さっきから、一向に鳴り止む気配のない単調な音。幸也はゆっくりとそこに視線を這わせた。
カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツ――。
黒板に刻まれた文字は、もはや幾度も上から塗りつぶされて、ほぼ真っ白に染められていた。それでも、現国教師は、あくまでマイペースに単調な音を黒板に刻みながら、真っ白に染められた黒板の上を、更に白く塗りつぶしていく。
「……マジかよ」
幸也が呟くと同時に、黒板に刻まれる単調な音がピタリと止んだ。不自然に腕を上げた現国教師は、その体勢のまま動こうとしない。クラスメイトは、一人、また一人とうめき声を上げていく。
まさか、悪い夢でも見てんじゃないだろうな。
幸也は自分のほほを思いっきりつねってみた。こんな状況で「んなベタな」と自分にツッコミを入れる余裕などありはしない。
「……いてえ」
というわけで、現実逃避もこれが現実であるという危機的状況を証明するだけで、幸也を正常な日常に返してはくれなかった。
信じられないが、これは紛れもない現実らしい。
幸いにも幸也の席は、真ん中の列の一番後ろに位置していた。つまり、教室の出口から比較的近い位置に幸也は今立っているというわけだ。が、このままこの状況を放っておいて一人だけ逃げるというのも何か後ろめたさを感じて、幸也は教室の後ろの出入り口まで来て、足を止めた。
入学してまだ二ヶ月ほどしか同じ時間を過ごしていないとはいえ、ここにいる連中は紛れもない幸也のクラスメイトなのだ。ううう、

とみんながみんな不気味にうめき声を漏らしていようと、みんながみんな白目をむいていようと、みんながみんな口からだらだらと涎を垂らしていようと――。

――やっぱ、逃げるか……。

この異変の原因がなんにあるにせよ、このまま教室の中にいては、自分までこんな風になってしまいかねない。何より、この場合保健の教員に知らせて適切な処置を施してもらうのが先決だろう。もっとも、この異変に対して一介の保険教師ごときに適切な処置を施せられるのかは謎だが、とにかくこの場は幸也一人ではどうしようもない。それに、よくよく考えてみればこの異変が起こっているのが幸也のクラスだけとも限らないのだ。

「……どうなってんだよ、クソ」

幸也はいまいましそうに呟いてから、教室を出た。

それは、この異常事態に一人取り残されたことへの不安ではなく、習慣としている授業中の居眠りを邪魔されたことへの単なる苛立ちだった。

あくまで、そのときの幸也はまだ、この事態をそれぐらいにしか見てはいなかったのだ。

第2話

＊＊　＊＊

――エンゼルライン学園高等学校第一体育館にて。

体育館では一年E組とG組が合同で六時限目の体育の授業を行っていた。エンゼルライン学園高等学校では一年生の体育の授業はクラス数が多いため、A、C組。B、D組。E、G組。F、H組。という具合に二クラス合同で授業が行われる。

せせらぎアスカは、体育館の隅の壁に寄りかかって、きゃあきゃあと体育館の中にこだまする楽しそうな女子生徒の声を聞きながら、躍動する健康的な体つきをした同世代の女の子たちをぼんやりと眺めていた。

今日の授業はバレーボール。憂鬱だ。もっとも、それがバスケであれバドミントンであれ、卓球であれ、運動音痴のアスカにとっては、すべてが憂鬱の種であることに変わりはなかった。

体育館は入り口から沿って、三面バレーのネットが張られていた。男女別々で授業が行われているため、一クラス二十人として、六人

で一チームを作り、一クラスで三チームができ、補欠が二人。例によって運動音痴のアスカは進んで補欠に回っているのだが、三つネットが張られている以上、六つのチームは滞りなく試合が回ってくるわけで、補欠の人間もいつまでも呑気に観戦、というわけにはいかない。もちろん、できればアスカも呑気に観戦といきたいのは山々だが、クラスに何人かはいる親切な人間の「よかったら、次アスカちゃん入りなよ」という親切心から来る言葉を断れないアスカは「うん。ありがとう」と笑顔で応答してしまい、胸中とは裏腹に試合に参加する羽目になってしまうのだ。

というわけで、アスカは授業開始から、二試合を何とか乗り切り、とりあえずのノルマを達成したところで（一人二試合は必ず入らなければならないと体育委員が言い出したのだ）、体育館の隅っこで、今は補欠の権限を活用して、試合観戦に回っているところだった。

どうも、自分は運動というものが苦手だな、と体育の授業をするたびアスカは痛感させられる。無理もない。二試合をこなしただけで息を切らしている横で、クラスメイトたちに自分よりも倍以上の試合数をこなしながら、きゃあきゃあと元気に飛び跳ねられては、ため息をつかずにはいられないだろう。

「はあ……」

アスカは小さくため息をついた。それで、気持ちが晴れるわけではないが、とりあえず多少なりとも自己嫌悪のはけ口ぐらいは作っておかなければ、やってられない。

「いい若いもんが、なーにため息なんてついてんのよ」

不意に横から声がして、アスカは思わず「キャッ」と短い悲鳴を上げた。

「キャって、あんたねえ」

「あ、ご、ごめん、千鶴（ちづる）ちゃん」

アスカは親友でもありクラスメイトでもある向井千鶴（むかいちづる）に気づくと、慌てて声を出した。どうやら、考え事をしているうちにさっきまで行われていた試合が終わったらしい。千鶴の後ろには神崎光（かんざきひかる）と渡瀬（わたせめぐみ）

恵もおり、二人も千鶴同様、からかうような顔をアスカに向けていた。
「あんた、ほんとに体育の授業嫌いなのね。あからさまなため息ついちゃって」
「べ、別に嫌いなわけじゃないよ。ただ、苦手なだけ！」
向きになって否定してみせるアスカを見て、三人は一緒になって吹き出した。
「な、なによ、千鶴ちゃん。光ちゃんも、恵ちゃんまで」
「だって、あんた。嫌いと苦手って同じようなもんでしょ？」
千鶴がおかしそうに言うと、その意見に同意して光と恵もチャチャを入れるようにいたずらっぽく言った。
「そうそう。嫌いと苦手って同義語でしょ」
「意味は同じだしね」
「同じじゃないよ。二つの言葉には大きな違いがあるんだから」
「へえ。どんな？」
「嫌いっていうのは感情の表現だけど、苦手っていうのはあくまで感情的な意味は含まれないの」
「うわあ、理屈っぽい。さすが読書家」
そう言って千鶴はアスカの横に並んで壁によりかかった。
「もう、からかわないでよ、千鶴ちゃん」
「だったら、ため息なんてつかなきゃいいじゃん」
「何でそうなるのよ」
不満をそのまま顔に出したアスカのしかめっ面に、三人はまた笑い出す。とそうこうしていると、体育館の中を甲高い笛の音が響き渡った。体育委員の女子が、再び試合開始を促したのだ。
「あ、千鶴。試合、試合」
そう言ってコートに戻ろうとする光と恵に、千鶴は「ああ、私パス」と面倒くさそうに言葉を返した。
「んもう、千鶴。また抜け出す気？」
「そんなことしてたら、そのうち絶対見つかって説教されるよ」

「だーいじょうぶ。そんときは、この子盾にして私だけ助かるって寸法だから」
そう言って、千鶴はぽんとアスカの肩に手を置いた。
「千鶴ちゃんってば！」
二人のやり取りに、光と恵は、あはは、と笑いながらコートの中に戻っていく。それからすぐに試合は始まり、体育館はあっという間にボールのはじかれる音と元気な黄色い声に包まれた。
「よし。じゃあ、そろそろいこっか、アスカ」
「ううー。何で私まで」
「はいはいはい。いいから黙ってついてくる」
そして、アスカは千鶴に背中を押されるまま、体育館を出るのだった。

グラウンドでは、男子生徒がサッカーの授業を行っていた。授業といっても、女子と同じように、二クラスでそれぞれチームを作り適当に試合をしているだけだ。もっとも、それも、たまたま今日に限って体育教師が風邪で欠勤しているからであり、普段は男子も女子もきちんとした形式にのっとった技術練習ばかりで、まともな試合などめったにやらしてはもらえない。まあ、教師がいないのにまじめに授業をしようなんて変わり者な生徒は男女合わしてもE組とG組には一人としていないということで、それは学生のあるべき姿ともいえる。
もっとも、だからといって授業を抜け出して男子の授業風景をのぞきに来るのはどうかとアスカは思うのだが。
エンゼルライン学園高等学校のグラウンドは、校舎が建っている

土地からは窪地になっているので、校舎側からは比較的グラウンド全体を見渡すことができる。といっても、グラウンドはかなり広く作られているので、校舎に比較的近いこの場所からでは、グラウンドを走っている人物が誰であるかを特定することはかなり難しい。それでも、千鶴は特定の人物を見るための場所をいつもここに決めている。

「お、やってる、やってる」

体育館から抜け出してきた千鶴は額に右手を当てて、遠くを見るポーズをとりながら、満足そうな声を漏らした。その横で、アスカは小さくため息をつく。

「あ。あんた、またため息ついたわね」

「そりゃあ、つきたくもなりますよ」

「なーに言ってるの。あんなところで女同士はしゃいでるの見てるよりはマシでしょうが」

そう言って、千鶴はたった今抜け出してきた体育館を、親指で指し示した。

「そういう問題じゃないの」

アスカはもう一度ため息をついてみせた。もっとも、ここにいること自体、強制ではなくアスカの意思なので、ため息は二回だけにとどめておく。アスカ自身、外で男子の授業風景を見守るのは嫌いではなかった。もっとも、千鶴とは別の理由でだが。

「ま、いいじゃん。過ぎたことはくよくよ悩まない。これ、人生を楽しく生きるコツね」

「もう。千鶴ちゃんったら」

おどけてみせる千鶴を見て、アスカはぷっと吹き出した。こんな風にアスカはいつも千鶴のペースに巻き込まれてしまうのだが、不思議とアスカはそれを一度も不快に思ったことはなかった。でも、千鶴のマイペースな言動を自己中と批判する人間はクラスでは大半を占めており、もっと全体を見渡してみればさらに多くの人間が千鶴を快く思わないのかもしれない。でも、明るくて活発な性格の千

鶴はいつでもクラスの中心的存在だから、表立って嫌な顔をする人間は誰もいない。体育館から抜け出すアスカと千鶴を体育委員が引き止めなかったのも、そういうことで、今頃は「男好き」とか「男ったらし」とか千鶴の陰口を叩いているのだろう。実際、アスカは千鶴のいないところでクラスメイトがそういう悪口を言っているのを何度も耳にしている。

表だって男子に近づくのはいやらしいことだ、と言わんばかりに、クラスメイトの大半は、男子に対して物怖じせず自然体でいられる千鶴を批判的な目で見る。もっともそれは、容姿端麗な上に明るくて、いつでもクラスの中心になっている千鶴への嫉妬からくるものなのだろう。ただ、アスカからすれば、そんなものは千鶴のことを何も知らない人間の見当外れな、勝手な思い込みに過ぎなかった。

グラウンドに続く階段の一番上に座りながら、アスカと千鶴はグラウンドの中でサッカーボールを追いかけている男子を見守った。そんな中、千鶴の視線はいつも、一人の男子生徒に注がれる。そして、千鶴本人は気づいていないかもしれないが、その男子生徒が何か行動を起こすたび、千鶴の表情は柔らかく微笑む。その遠くを見つめる優しい千鶴の横顔が、アスカはたまらなく好きだった。そこから見える、普段の千鶴からは見えない、繊細な一面。男好きだとか、男ったらしだとかいう陰口なんて、その千鶴の優しい横顔になんて入り込む余地はない。

そのことを、アスカは知っていた。そして、だからアスカは千鶴のマイペースにいくら巻き込まれても千鶴のことを憎めないのだ。

「ねえ、千鶴ちゃん」

「ん？」

「千鶴ちゃんのこと悪く言う人もいるけど、私はそんなこと思ってないからね」

「……なによ、突然」

頬杖をついてグラウンドに広がる景色を眺めていた千鶴は、横目でアスカを見ながら、いぶかしげな表情を作った。自分で言ってお

きながら、無理もないな、とアスカも思う。
「ごめん。気にしないで。なんとなく、言いたくなっただけだから」
「なんとなくで、そんな恥ずかしいこと言わないでよ」
迷惑そうに声を出す千鶴。これも無理もないな、と思う。
「そうだね。ごめん」
「――ま、いいよ。悪い気はしないしね」
そう言って、千鶴は照れくさそうに微笑んで、アスカから目を逸らした。そんな千鶴を見ながら、アスカは思った。
この時が、ずっと続けばいいのに。明日も明後日も、その先も――。
「……なんだろう」
独り言にも取れる千鶴の呟きが、ボーとしていたアスカの意識をひきつけた。
「どうしたの、千鶴ちゃん」
そう問いかけながら、アスカは千鶴の見ている景色の先へ視線を流した。そして、すぐにアスカはその異変に気がついた。
さっきまでグラウンドの中を走り回っていた男子全員が、みんなピクリとも動かなくなっているのだ。まるで静止画像のようなその光景に、アスカはただならぬ不安を感じて、千鶴に声をかけた。
「みんな、どうしちゃったのかな」
「ア、アスカ……」
「千鶴ちゃん？」
かすれるような千鶴の声に、アスカが千鶴に目を戻したときには、もう千鶴にもその異変が降りかかっていた。
まるで寒さに震えるように、肩を抱いて、ぶるぶると震えている千鶴。顔は青ざめて、その表情は何かに怯えるように弱弱しく揺れていた。
「ち、千鶴ちゃん。どうしたの？　気分、悪いの？」
アスカはそう言うと、慌てて千鶴のそばに寄った。
「ア、アスカ……わ、たし……ど、どうしちゃった……のかな……」

「千鶴ちゃん！　千鶴ちゃん！　大丈夫？　千鶴ちゃん！」
「あ……あ……」
がたがたと体全体を震わせながら、千鶴はことときれた人形のようにどさりと横に倒れこんだ。アスカは、なにが起こったのか理解できず、少しの間、白目を向いた変わり果てた千鶴の姿を呆然として見つめた。
「あ……あ……」
アスカの目からぽろぽろと涙が零れ落ちてきた。そして、その涙に追いつくように、後から不安と恐怖の入り混じった、激しい感情がアスカの中に流れ込んでくる。
――私が、何とかしなきゃだめだ。
不安と恐怖に駆られながらも、アスカはそう自分に言い聞かせて立ち上がった。その足元には、変わり果てた千鶴が仰向けになって、転がっている。
アスカはごしごしと頬を伝う涙を拭うと、職員室目指して駆け出した。

第3話

＊＊　＊＊

――エンゼルライン学園高等学校二棟屋上にて。

六時限目の授業が氣術訓練だったので、寺島隆也（てらじまりゅうや）は授業をサボって屋上に来ていた。授業をサボるとき、隆也はいつも屋上に足を運んでいた。もっとも、それは屋上＝サボりという定番に合わせているわけではなく、ただ単に、隆也が遠くを眺めることが好きということだけが、屋上に足を運んでいる理由だった。そもそも、隆也は意味もなく授業をサボるような不良ではなく、サボる授業も今第二体育館で行われているであろう氣術訓練だけだ。

氣術訓練とは、その名の通り、氣術のスキルをあげるための実践的な授業だ。まあ、実践的といっても、一年生のうちは氣を併用させるという点を除けば、内容は普通の体育の授業となんら変わることはない。が、隆也は日ごろからあえてこの授業だけには出ないようにしていた。

氣とは、誰もが体のうちに持っている秘められたエネルギーのこ

とだ。はるか昔、人はこの氣の力を超能力だとか、超常現象だとか呼んで珍しがっていたらしいが、ある日を境に、人はその力を扱えるようになり、今では氣を扱えることは常識として世界中に広まっていた。

隆也は落下防止用のフェンス越しから、遠くの景色を眺めた。連なる高層ビルに、自動車の行き交う高速道路。目に映るものは、人の手によって創られたものだけだ。それ以外のほとんどは人の手によって蝕まれている。だから、隆也の目はいつも自然にそこから、上へと這い上がっていく。そこには、いつ見ても変らず果てない青空が広がっている。

――そう。あの時もちょうど、こんな青空が広がっていた。

屋上に備え付けられたベンチに仰向けに寝転んで、隆也は果てなく広がる青空をぼんやりと眺めていた。何も考えずにそうしていても、意識の端っこでは常にあのときの光景が鮮明に浮かび上がってくる。でも、それを消そうとしてしまえば、今度はその罪悪感に押しつぶされる。が、それも仕方のないことだ。すべては自分が悪いのだから。

どれぐらい、そうしていただろう。目をつぶったまま、居心地の悪い、どすぐらい罪悪感の中に浸っていると、屋上の扉の開く音がどこからともなく流れてきた。その扉を開けた人物は、迷うことなく隆也の下へと近づいてくる。隆也はその気配を感じながら、自分のもとに近づいてくる足音が誰であるかを考えてみた。

今サボっている授業の担当教師。とは思えない。自ら授業を受けることを放棄した不真面目な生徒のために、他の真面目な三十九人の生徒をほうっておくような真似はいくらなんでもしないだろう。かといって、クラスの学級委員とも思えない。隆也を授業に連れ戻しに行くことを、クラスメイト全員は自殺行為だと思っているはずだからだ。しかし、授業のない教員が暇つぶしに見回りをしている可能性は、前に挙げた二つよりよっぽど低いだろう。そうなると、足音の主は、隆也の予想できる範囲の外側にいる人間、つまり分かりやすく言い換えるなら、見ず知らずの他人、ということになるのだが、どっちにしろ、どれをとってみても可能性は等しく低いことは間違いなかった。

やがて、足音は隆也のそばまで来るとピタリと止んだ。

「なんだ。先客がいるなんて、珍しいな」

隆也は聞き覚えのない声を聞いてから、ゆっくり目を開けた。

「誰だ？」

「うおお！」

隆也がゆっくりと身を起こすと、声の主は大げさに驚いて声を上げた。

「起きてんなら、起きてるって言えよ！　びっくりすんだろが！」

「ああ、スマン」

「いや、まあ、謝らなくてもいいけどよ」

そう言って、ぽりぽりと頭をかく見慣れない男子生徒に、隆也はじっと目を留めた。銀色をした鮮やかに艶めいた短髪の髪が一番に目に入る。少しつりあがった目は意志の強そうな印象を与え、高く上がった鼻や、きれいにかたどられた輪郭は、まるで作り物の人形めいた美しさを連想させた。が、その銀髪の生徒はその美しさとは反対に位置する性格の持ち主らしく、じっと自分のことを見てくる隆也に、その銀髪の生徒は眉をひそめて「なにじろじろ見てんだよ。気持ちわりーな」と声を出した。

「言っとくけど、俺はそっちの趣味はねーぞ」

「俺もだ」
「そうか。そりゃなによりだ。――で？」
「なんだ？」
「いや、名前だよ名前。あんた誰？」
「寺島。寺島隆也。１―Ｄだ」
「１―Ｄって、タメかよ、おい！」
「そうなのか？」
「そうだよ。つーか、でけえな、お前。身長何センチだよ、それ」
そう言って、銀髪の生徒は隆也の隣に腰を下ろした。
「１９２だ」
「１９２？」
「ああ」
「おかしいな。噂の殺人マシーンってのは、体長二メートル五十センチの筋肉ゴリラって聞いたんだけどな」
「お前、俺のこと知ってたのか」
「いや、知らねえよ。ってか、名前聞いてる時点で初めましてだろ」
「そうじゃなくて、俺の噂のことだ」
「噂？　ああ。知ってるけど、だからってお前のこと知ってるってことにはなんねえだろ？」
「……」
「だから、じろじろ見んなって気持ちわりー」
「変ってるな、お前」
「お前に言われたくねーよ」
「そうか」
「そうかって、お前なあ……。ま、いいけど。しっかし、究極にからみづらいな、お前」
「よく言われる」
「だったら、直す努力しろよ」
「こういう性分なんだ」
「あーそうかい。ま、いいさ。俺も他人に言われて自分の性分直す

気ねーからな」
「そうか」
ちぇ。そう舌打ちすると、銀髪の男子生徒はつまらなそうにぼりぼりと頭をかいた。隆也は、そんな銀髪の男子生徒の様子を、横目でうかがった。
なぜか、隆也は妙に馴れ馴れしいこの銀髪の男子生徒のことを、嫌うことができなかった。まだ、名前も知らないこの人間に対する、言葉にできないシンパシー。隆也は、言葉に変えられない何かを、まだ初めて口を利いて五分も経たない人間に感じていた。
「なあ。お前、氣術訓練でクラスメイト半殺しにしたっての、ほんとか？」
「ああ」
「んで、もう氣術訓練の授業には出ないのか」
「ああ」
銀髪の男子生徒は「ふうん」とつまらなそうに返事をすると、横目で隆也を見ながら、声を出した。
「なんつーか、あれだな。人ってのは、力がねえと欲しがるくせに、力があると、捨てたがんだよな」
「……何の話だ？」
「別に。ただ、望んでもねーのに力がありすぎるってのも問題だよなって話さ」
「そうか」
「そうかって……。ったく、暗いなあ、お前」
「そういう――」
「性分、ってか？」
「そうだ」
「ったく、ほんとにからみづらい奴だな。友達いないだろ、お前」
「そうだな」
「いや、笑うとこじゃねーよ」
銀髪の男子生徒は呆れたような声を出してから、今度は眠そうに

あくびをした。
「つーか、授業サボって屋上まで来て、何で俺は野郎とだべってんだよ。俺は昼寝しに来たのによ」
「そうか。そいつは悪かったな」
「いや、別にお前が俺に謝る必要はねえよ。屋上はみんなのものだからな」
　それから、銀髪の男子生徒はベンチの上に仰向けに転がった。隆也は、ベンチから腰を上げて、手すりに体を預け、空を仰いだ。
「一つ、聞いてもいいか」
「ん？　なんだよ」
「お前、俺が怖くないのか？」
「は？　なんだよ、急に」
「よく、そう見られる」
　二メートルにも及ぼうかという巨漢に、類まれな氣の力。それだけで隆也は今まで他人から恐怖の対象として疎まれてきた。もちろん、今まで出会ってきた人間すべてが見た目だけで隆也を判断する人間だったわけではない。だが、類まれな氣の力は、人を傷つけるものでしかない。本人にその意思がないにしても。
　そして、隆也の周りに残った人間は、誰もいなくなった。
「くだらねえ質問すんなよな」
　銀髪の男子生徒は、隆也を見もせずに、目を瞑ったまま声を出した。
「俺には怖いものなんか何にもねえよ。俺を誰だと思ってんだよ」
　隆也は少しポカンとしながら、銀髪の男子生徒に目を向けた。口元が少し緩んだのは、意識してのものではなかった。
「いや、知らない」
　隆也の言葉を聞いて、銀髪の男子生徒はゆっくり身を起こした。
「そういや、俺だけまだ自己紹介してなかったな」
「ああ」
「悪い、悪い。俺は鳴瀬川幸也。１―Ａだ。ま、覚えなくてもいい

けどな」
「いや、覚えておく」
「そりゃ、どーも」
そして、幸也はベンチに仰向けに転がった。
「ほんとに、変わった奴だな」
隆也は幸也の寝顔をチラッと見てから、声を出した。

顔を上げるのを止めて、隆也はグラウンドの方へ視線をずらした。
昔のことを懐かしむなんて、なんだか老人みたいだな。そう思い、一人で小さく笑ってみる。まあ、昔、と言ってもつい二ヵ月ほど前のことだが。
「鳴瀬川幸也……か」
結局、あれから一度も会うことはなくなったのだが、隆也の頭から幸也のことが消え去ることはなかった。
あの時感じた、言葉にできないシンパシー。
できれば、もう一度会ってみたいな、と思う。別に、友達になりたいとかいうわけではないが、不思議と幸也と話しているとき、隆也はいつも他人に作る壁を取っ払っていたように思う。幸也の自然体な接し方が、隆也の作る壁を壊してくれたのだ。
「……なんだ？」
何気なくグラウンドに目を向けていた隆也は、その光景にすぐに違和感を覚えて、声を出した。
グラウンドでは、確か一年E組とG組が体育の授業を行っているはずだった。そして、現にグラウンドには生徒たちの姿があるには

あるのだが……。
グラウンドに立つ生徒全員が、ボーと突っ立って動いていないのだ。それは、遠目から見ても、奇妙な光景に他ならなかった。
しばらく、その奇妙な光景に目を留めていると、どこからか女の子の叫び声が聞こえてきた。その声を追って視線をずらすと、校舎側の階段付近のところに、女子生徒が二人いるのが目に入ってきた。
一人はぐったりと倒れこんで動く気配を見せない。そして、もう一人の女子生徒が、必死にその女子生徒に何かを叫んでいた。
やがて、女子生徒は叫ぶのを止めると、少しの間呆然とその場に立ち尽くしてから、すごい勢いでその場から立ち去ってしまった。
ただならぬ気配を察した隆也は、はじけるように屋上のドアを抜け、グラウンド目指して校舎を駆け下りた。
言い知れない、嫌な予感が隆也の中をよぎっていた。

第４話

＊＊＊　　＊＊＊

――エンゼルライン学園高等学校一棟一階職員室にて。

六時限目の始まりのチャイムが鳴り響き、桐生真奈美（きりゅうまなみ）はようやく落ち着いて自分の席に腰を下ろした。

教育実習生としてこの学園に来て、二週間。ようやく今日が実習最後の日だった。

この時間は、教員みんな授業に出払っていて職員室の中には真奈美しか残っていなかった。本来なら、授業がないにしても実習生である真奈美がこうして、自分の席に座って呑気に休むなんていうことは許されない。いや、許されるにしても、やる気のある実習生なら何も仕事がなければすぐさま他の教員の授業見学に向かうだろう。

「はあ……」

小さくため息をついてみる。それは無人の職員室にむなしく響き、真奈美の虚脱感をさらに大きくしただけだった。

理想と現実。ある程度の予想はしていた。少なくとも、自分の思い描く理想の学校なんてものはこの現実には９９パーセントないな、とも自覚していた。

それでも、この現実は真奈美にとって耐え難いものだった。
無気力、怠惰。そういったものを画に描いたような教員たちの姿を、こうもまざまざと見せ付けられては……。
その対象が生徒であるなら、真奈美もここまで落胆することはなかっただろう。生徒全員に完璧を求めるなど無理な話だし、何よりそれを正すのが教師の仕事なのだから。だが、その対象が教員となると、もううなだれるしかない。まさか、まだ学生の身分である教育実習生が教員たちに「きちんとしてください」なんて言えるわけがないし、言ったとしても逆にこっちが説教を受けるハメになるだけだ。
日を重ねるごとに、真奈美の中にあったやる気はそがれていった。
「はあ……」
もう一度ため息をついて、真奈美は時計に目を向けた。
１４時４０分。
まだ授業が始まって十五分。これから出向いても、見学するには十分間に合う。
気は進まないが、正真正銘これが最後になるのだから、けじめだけはきちんとつけなければ。そう自分に言い聞かせながら、真奈美は重い腰を上げて職員室を出た。
真奈美の専攻は氣術なので、当然見学するなら氣術の授業だ。確か、六時限目の氣術は三年Ｇ組だった。三年Ｇ組の教室は……。
「どこだったかな……」
一年生の授業を担当させられていた真奈美が、三年生の教室の場所など分かるはずがなかった。二週間ですべての配置を頭に入れきるには、この学校は広大すぎる。そもそも、授業の準備に追われる日々で、呑気に学校の中を見回る時間もなかったのだ。
真奈美は仕方なく、来た道を引き返して職員室に戻ろうとした。確か、職員室の入り口には、学園の詳細な配置が記載された紙が貼ってあったはずだ。が、振り返ろうとした真奈美の足は、反射的に止まっていた。

ダダダダダダ……。
どこか上のほうから、何かものすごい音が響いてきたのだ。
これは……足音？　そう思ったその時だった。
ダン！
すごい音を響かせて、巨大な物体が宙から降ってきて地面に着地したのだ。
「……！」
真奈美は身をこわばらせて突然視界の中に割り込んできた巨大な物体に目を見開いた。しかし、その一秒後に真奈美はその巨大な物体が、人間であることを理解した。その一秒後にはその人間がうちの学校のブレザーを着込んでいることを、そして、その一秒後にはそれがうちの生徒であることを、そして、その一秒後にはその男子生徒が宙から降ってきたように見えたのは、ただ単に階段から飛び降りてきただけなのだということを理解した。しかし、その頃にはその大柄な男子生徒は真奈美を無視してもう通路を駆け出していた。
我に返った真奈美は、はっとしてその男子生徒を引き止めた。
「ち、ちょっと待ちなさい！」
真奈美の声を背に受けて、その男子生徒は意外にも、素直にぴたりと足を止めて、後ろを振り返った。
二メートルはあろうかという大柄な体格をした男子生徒。真奈美は、その男子生徒に見覚えがあった。いや、正確には聞き覚え、というべきだろう。
「あ、そうだ。一年生の授業を受け持つ上で忠告しとくけど、無事に二週間を終えたいなら、１―Ｄの寺島隆也にはちょっかい出さないほうがいいよ。入学そうそうクラスメイトに大怪我させた問題児だからね」
実習初日、一人の教員が真奈美にそう忠告してきたのだ。結局１―Ｄの授業は一度もすることがなく、その問題児とも接触する機会はなかったのだが……。
「そいつ、ゴリラみたいな奴だからさ。下手に刺激したら、なにさ

れるか分かんないよ？」
ゴリラみたいな奴……。
真奈美は、直感的にその男子生徒が、寺島隆也であることを悟った。
やがて、男子生徒は真奈美の前まで来ると、無言で真奈美を見下ろした。真奈美は男子生徒の無言の圧力に気後れしながらも、すぐに心の中で自分に喝を入れた。
「い、今は授業中でしょう。こんなところでなにをしているの？」
自分でも声が震えていることが分かる。情けないぐらい、小さな声しか出ない。
それを馬鹿にするように、男子生徒はただ黙ったまま真奈美を見下ろしていた。
「質問に答えなさい」
自分に喝を入れるように、語気を強める。すると、黙っていた男子生徒が唐突に口を開いた。
「あんた、教師か？」
「え？」
「教師かって聞いてる」
質問にというより、見た目からは想像のつかない男子生徒の静かな声に、真奈美は戸惑った。
「だ、だとしたらどうだというの」
つい、男子生徒のペースに乗って、質問に答えてしまう。
「そうか。ちょうどよかった」
その言葉とともに、男子生徒はおもむろに真奈美の腕をつかんだ。反射的に真奈美は男子生徒の手を振り解いた。
「な、なにするの！」
「校庭で、女子が一人倒れてる」
「……え？」
「……うまく説明できない。とにかく、なにかおかしい。来てくれ」
再びつかまれた腕を、真奈美がもう一度振り払うことはなかった。

わけが分からぬまま、真奈美は男子生徒に引っ張られるがまま校庭を目指すのだった。

第5話

――エンゼルライン学園高等学校5棟1階渡り廊下にて。

「っくそ。一体どうなってんだよ」

幸也は、思わずはき捨てるようにそう呟いていた。

初めは、単なる悪い冗談かと思った。百歩譲って、これが現実だとしても、この状況の中で自分一人が取り残されているわけでもないだろう。そう幸也はタカをくくっていたのだ。が、保健教師を探しに教室を出た幸也の目に飛び込んできた光景は、どこを見渡しても、自分の教室とまったく同じ地獄のような光景だった。

1棟から4棟までのすべての教室を確認したが、正気を保っている人間は一人もいなかった。教師も生徒も関係ない。この異常は、無差別にこの学園を飲み込んでいるのだ。

「クソ……」

焦りと不安の入り混じった、心地の悪い感情が幸也の胸の奥からじわじわと染み出していた。それは、徐々に幸也の胸に浸透し、普段滅多に動じることのない幸也を飲み込もうとしていた。

つい一分前、異常が学園内に充満していることを理解した幸也の足は、まっすぐに1年E組の教室に向かっていた。しかし、たどり着いたそこに生徒の姿は一人もいなかった。おそらく、六時限目の授業が体育なのだろう。無人の教室の中の席の上には、持ち主たちの着替えが無造作に置かれていた。そして、すぐさま幸也は第一体育館を目指して駆け出し、今はちょうど5棟の校舎までたどり着いたところだった。

第一体育館は学園の南側、グラウンドの手前に建てられている。

体育の授業が行われているとしたら、そこか、後はグラウンドだろう。
とにかく、幸也は全速力で走りながら第一体育館を目指した。
不安が自分の中で加速していくことが分かる。この異常が、すでに学園すべてを飲み込んでいるとしたら――。
幼馴染の顔が、幾度となく幸也の頭をちらついていた。
もしかして、あいつももう――。
今まで見て回ってきた限り、正気を保っている人間は一人もいなかった。それを考えると、希望的観測は、ただ虚しくなるだけだ。
「ちくしょう……」
なんでこんなことになってしまったのだろう。答えなど出るはずもないのに、そんなことを考えてしまう。
この異常事態の原因は一体なんなのか。そして、なぜ自分は正気を保っていられるのか。
答えの出ない迷路に迷い込もうとしたその時背後から甲高い音が鳴り響いて、幸也は驚いて足を止めた。
振り返ると、ちょうど幸也が通り過ぎた教室の窓ガラスが派手な音を立てて砕け散っていた。同時に、椅子が派手な音を立てて廊下に放り出され、砕け散った窓ガラスの破片と一緒に鈍い音を反響させる。それを合図にしたように、そこかしこから耳を塞ぎたくなるような怒号が突然、大気をビリビリと振動させた。
「な、なんだ……？」
まるで、学園が怒号の渦の中に放り込まれたみたいな錯覚に陥るほど、争い声とものを破壊する鈍い音や甲高い音が周り中から響いてくる。そして、その原因がなんなのかは一目見れば明らかだった。
さっきまで正気を失って動かなくなっていた生徒たちが動き出して、暴れているのだ。そして、その様子は普段よく見る街角でのケンカなどとは比べるべくもなく、凄惨だった。
これが、本当に人間の姿なのだろうか。幸也はその光景を目の当たりにして、背筋に冷たいものを感じた。

白目をむいて青ざめたその顔は、みな一様に意識を失い、自我さえも失っていることは明らかだった。そんな人間が突然動き出し、敵も味方も目的さえもなくただ自分以外のものを壊していく。机も椅子も窓もドアも、そして人さえも。

暴力に支配された地獄絵図。やがて、それは教室からあふれ出し、幸也にも降りかかろうとしていた。

教室から徐々に廊下にもれ出てくる人の群れ。６棟の校舎だけではなく、隣に見える５棟の教室からも、正気を失った人間が何人も廊下にあふれ出ていた。

後方の通路は次々に教室から出てくる生徒たちによって完全に塞がれた。考えるまでもなく、幸也は第一体育館目指して駆け出した。

背後では、人間の壊れていく音が途絶えることなく響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7807a/

サバイバル・ゲーム

2010年10月28日07時11分発行